

第6章 低炭素化まちづくりへの課題

7.1 市民から見える「低炭素化まちづくり」

流山市の「地球温暖化対策実行計画」（2010年3月）の中期目標（2020年度）において、市の施策5プロジェクトのうち、市民が直接的にかかわる事項について検討する。

環境家計簿普及プロジェクトは、「家庭」でのエネルギーや資源の消費にかかわる事項であるから、「直接的プロジェクト」といえる。しかし、極論すれば、市民のプライバシー的な事項であるから、行政による把握にはそれなりの工夫が必要である。

環境マネジメントシステム導入プロジェクトは、事業所での「活動」であるから、関わりは弱いといえる。

再生可能エネルギー利用プロジェクトは、市の「助成・補助」に基づくものと限定すれば、導入量の把握はできるが、自主導入の把握は困難である。また、導入量は把握できたとしても、その効果の把握は「生活様式の変化」を伴う可能性があり、客観的、定量的に把握可能かどうかには疑問が残る。

ながれやま交通改革プロジェクトは、モーダルシフトの把握が必要であり、モーダルシフトの前後の把握が出来なければ、定量的評価は困難を伴う。

ケロクルタウン形成プロジェクトは、市民の3Rの進展に伴う結果として、クリーンセンターで計測できることから、市民トータルという形で計測可能である。クリーンセンターでカウントした「地区毎の排出量」を知らせることにより、市民位として「見える化」されたことになる。

上記5プロジェクトの「削減目標」の設定は、「将来の人口・社会」を想定することにより推算は可能である。しかし、市民の努力とは「乖離した値」といえる。市民の努力が自己計測・評価できる「環境家計簿」を通してである。しかし、再生可能エネルギーによる削減も、環境家計簿に包含され計上され、分離は殆ど困難である。交通改革（モーダルシフト）による効果も、ガソリンや軽油の購入量として「環境等家計簿」で計上できるが、シフト量や社会環境の変化に伴うパーソントリップの変化も経年的データが必要であり、データの獲得と保存が必須になる。このように、市の施策による4プロジェクト（EMS導入は除外）の効果の多くは、環境家計簿を介してである。「再生可能」「交通改革」による削減量は、環境家計簿の変化幅の中に組み込まれて現れる考えておくことが肝要であろう。

次に、国の施策（長期エネルギー需給見通し）の項で示されている「民生家庭」について試してみる。具体的施策の欄に「省エネ機器の買換促進、住宅の省エネ性能向上」がある。

市民が省エネ機器を購入した結果、電気消費量が削減されたとき、この削減量は「国の施策」に勘定されることになる。この成果は「環境家計簿」に現れ、これが「国の施策」になるから「環境家計簿推進」による効果から除外される（文脈上）ことになる。市の削減効果料として分離可能であろうか。また、市民感覚に合わない考え方である。

このような課題があるから、「温暖化防止対策実行計画」とは距離を置いた「市民による低炭素化」という視点での「まちづくり」を考えるべきである。分離したとしても、「市民による削減が進め」ば、その結果の幾何化は「中期目標」へ効果が出るはずである。県の値を案分する事項などが存在するため、市民が進化すれば「薄められ」た値として計上されるからである。（平均値の論理からは、何ら問題ないが）

6.2 システム構築と「緊急計画」

以上のように、「中期目標」に囚われず、「市民の努力」を評価するシステムの構築が要請される。システムが全部そろってから運用するとなると、この種のシステムは往々にして「動かない」ことが多い。

年度末になり、第一福島原子力発電所の地震津波による被災から、原子力災害に拡大し、東日本での電力不足が心配されるようになった。電力系統において、ピーク電力需要に対応できないと、発電施設で「トリップ」が生じる。結果として「ブラックアウト」（広域大停電）の生起が心配される事態になった。市民も、「省電力」に努めなければならなくなった。「塵積（チリツモ）省電力」である。

この機を、エコノートの活用と、省エネ活動を進めることも一案である。掛け声だけでは、実際の削減量の評価はできない。ここに、電気消費性向の考え方をういた「運動」を起こすべきと考える。もちろん、一気に活動できることではないが、「計画停電」の実施は「気温」に左右されるとの報道もされるようになった。「解りきったこと」ではあるが、個々の市民の省エネ評価ができることの下地情報は流れた事になる。理解は得やすい。

そこで、不十分ではあるが、図 6.2-1 に示す手順で試行してはと考えている。「行動計画」を作成し、情報を発信する準備が必要になる。できるだけ早い時期に。

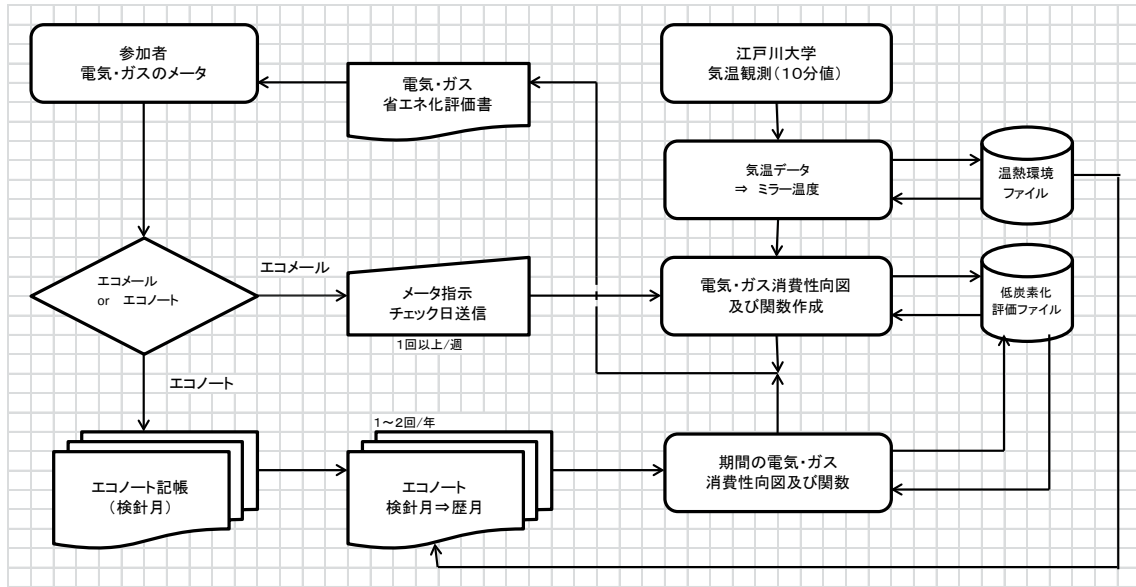


図 6.2-1 エコノート/エコメールによる省エネ活動結果の「見える化」